

## 関西における大学女子バレーボールの歴史：連盟の発足から男女連盟の統合まで

著者	山本 章雄
引用	人間関係論集. 2005, 22, p.153-158
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00011263">http://doi.org/10.24729/00011263</a>

論 文

# 関西における大学女子バレーボールの歴史

—— 連盟の発足から男女連盟の統合まで ——

山 本 章 雄

## 1. 連盟の発足

関西女子大学バレーボール連盟が発足したのは、昭和28年（1953）であり、その前年開催された「近畿バレーボール大学女子選手権大会」（京都女子大学優勝）が契機となっている。当時は、昭和21年（1946）に再興された、男子チームによる「関西学生バレーボール連盟」が活発な活動を展開していたが、男子の連盟に依存することなく、女子独自の連盟結成の機運が高く、関西の地に所在する22大学の女子バレーボール部によって連盟が結成された。

連盟結成の翌年（昭和29年）には、「関西女子大学バレーボール優勝大会」（5月30日）、「関西女子大学バレーボール選手権大会」（10月17日）などの大会が開催された記録が残っている。当時は、発足間もない「関西女子大学バレーボール連盟」が全日本女子学連への加盟問題で苦慮している時期でもあり、こうした混乱の中での大会開催には、相当の困難が伴ったことが想像される。しかし、この難局も多くの大学バレーボール関係者の献身的な努力によって克服され、同年3月13日には、関西を含んだ全日本女子学連の規約が制定された。これを受け、7月21日から25日まで「第1回全日本バレーボール大学女子選手大会」が、全日本大学バレーボール連盟・日本バレーボール協会・京都市などの主催、関西女子大学バレーボール連盟主管のもと、全国から40を超える大学の参加を得て、京都市岡崎公園バレーボールコートで開催された。関西からは、京都女子大、光華短大、滋賀大、池坊短大、京都学芸大、大阪成蹊短大、大阪樟蔭大、神戸大、神戸女学院大、武庫川女子大、帝塚山短大、奈良学芸大、大阪市大、和歌山大、大阪女学園短大の15校が参加し、京都女子大が準決勝まで駒を進めた。まさに関西に於ける女子大学バレーボール萌芽のビッグイベントであった。

## 2. 関西女子大学リーグ戦の開始

昭和30年(1955)になると「関西女子大学バレーボールリーグ戦」が連盟正式大会として開始され、春季リーグ戦は5月29日より、秋季リーグ戦は10月17日より、それぞれ中モズ競技場を基点として開幕されている。リーグは、連盟加盟22大学のうち競技力の高い4大学(京都学芸大、大阪市大、武庫川女子大、奈良女子大)を1部校としてシードし、他の大学はABCのブロックに分かれ先ずリーグ戦を行い、優勝チームが1部参加決定戦を行う方式で実施され、大阪成蹊短大が1部参戦を果たしている。1部リーグの結果は、春秋とも実業団の一流チームと互角の力を有していた京都学芸大(現・京都教育大)が、栗田正男監督のもと優勝を飾っている。また、この京都学芸大は同年の「第2回全日本バレーボール大学女子選手権大会」(東京・田園コロシム)において、第1回大会の覇者日本体育大を準決勝で、また、決勝で東京学芸大とともにストレートで破り優勝を成し遂げ、関西女子大学バレーボールの実力を全国に示した。初代の女子大学連盟会長であった森脇正夫氏をはじめ関西の関係者は、この快挙におおいに感激、発憤させられたことが想像できる。

## 3. 武庫川大学の黄金期

昭和31年(1956)の春季リーグ戦(1部)では、武庫川女子大が勝利し、この優勝をスタートに昭和46年(1971)秋季リーグ戦までの16年間(32シーズン)に渡って連覇がつづくこととなる。また、同年の「第3回全日本バレーボール大学女子選手権大会」でも、武庫川女子大が花岡勉監督のもと、日本体育大をフルセットの末突き放し優勝を遂げ、関西女子学連の2連覇を達成している。同校は、その後二宮恒夫氏を監督に迎え(昭和33年)、全日本選手権準優勝6回、3位6回の輝かしい成果により「武庫川女子大全盛期」を築き、関西のみならず日本の大学女子バレーボールを牽引する原動力となった。

## 4. 9人制から6人制へ

関西女子学連における9人制から6人制への移行は、昭和37年(1962)から昭和38年(1963)にかけて行われた。6人制の公式戦は「関西6人制バレーボール大学女子選手権大会(昭和37年11月)」が最初であるが、翌年の昭和38年リーグ戦(春秋)では、6人制および9人制が併行して実施されており、移行に対する意見調整が難しかったことが推察できる。しかし、東京オリンピック開催年の昭和39年には6人制へ完全移行し、この年より男女学連共催の「近畿6人制バ

レーボール大学男女選手権」も開催されている。

また、女子学連発足後10年余りが経過したこの頃には、加盟チームが27校となり、第2代山口義男会長、藤田茂雄副会長の指導のもとリーグ制度が4部制（各部6校・4部は9校）へと拡大編成され、学連の充実発展が図られていった。

## 5. 関西出身選手の国際試合での活躍

一方、国際試合に於ける関西女子学連関係者の活躍も、この頃より活発となり、昭和40年（1965）のブタペストユニバーシアードには、渡辺・久世・山口選手（武庫川女子大）が参加し、昭和42年（1967）東京ユニバーシアードには、山口・吉原・伊井選手（武庫川女子大）と二宮恒夫氏がコーチとして出場し、優勝の栄冠を獲得している。またその後も、昭和45年（1970）トリノ大会には、増井（武庫川女子大）・小川（池坊短大）両選手が、昭和48年（1973）のモスクワ大会には玉川・湯汲（武庫川女子大）、鈴木（池坊短大）の3選手が出場するなど、関西の地で鍛えられた選手達の国際舞台での活躍が、今日に至るまで脈々と続いている。

## 6. 戦国時代の到来

昭和47年（1972）春季リーグは、関西女子学連にとって新しい時代の幕開けとなった。それは、これまでリーグ戦32連覇を誇っていた武庫川女子大学の壁を、練習用の体育館を持たない池坊短期大学が、高市正信監督の厳しい「青天井練習」に耐え抜くことにより打ち破り、初優勝を飾ることにより成し遂げられた。その後、池坊短期大学は、昭和54年春季から昭和56年秋季までの6連覇を含め、昭和59年の秋季優勝に至るまで19回の優勝を果たし、約10年間に及ぶ「池坊時代」を築きあげていった。また、この強固な「池坊時代」において特筆すべきことは、花田敬一監督率いる天理大学が昭和49年（1974）春季に、山本隆久監督指導の大阪体育大学が昭和53年（1978）春季に、地道な練習をコツコツと積み重ねることで、見事初優勝を獲得したことであり、こうしたチームの優勝は、女子学連所属の各チームの大きな励みと目標になった。

## 7. リーグ戦制度の改変

またこの間、学連加盟の大学数も急増し、関西女子学連発足20周年の昭和48年（1973）には46校、30周年の昭和58年（1983）には64校を数えるに至っている。こうした状況に対応するため、藤原慎一代表評議委員を中心に部制の改変が逐次検討され、昭和49年（1974）には、1部

(6チーム)、2・3部(各8チーム)、4部A～Dブロック(各6チーム)制度が施行された。また、昭和57年(1982)には、これまで4部が横割りブロック制となっていた点が見直され、単純縦割り7部(各8チーム、但し7部のみ12チーム)制度の採用、および入替戦制度の改変(最下位、最上位は自動入替。2位、7位は一回戦入替戦)が行われ、多様な大学がその実力に応じて有意義にリーグ戦に臨めるよう制度が改められていった。

## 8. 各種事業の展開

学連加盟大学数の増加への対応は、リーグ戦制度の改変だけに止まらず、多くの加盟大学を抱えた関西女子学連が一層発展するための基盤となる「年間事業スケジュール」の検討へと進み、強化普及を目的とする「関西学生選抜大会」が昭和52年12月(1977)より男子学生連盟との共催で開催されるに至った。この大会はその後、昭和57年(1982)より「関西学生バレーボール大学男女新人大会」としてリニューアルし、昭和61年(1986)まで10年間にわたって開催され、その間、関西の強豪実業団チームとの対抗試合をメインイベントとして行うことなどにより、その役割を達成していった。

その後も関西女子学連の加盟大学数は増え続け、関西女子大学リーグは昭和58年(1983)に7部制より8部制(64チーム)に、昭和61年(1986)には9部制(68チーム)に、そして連盟創立40周年の平成5年には10部制(82チーム)へと発展するに至った。

昭和59年(1984)秋季リーグの優勝を最後に「池坊時代」は終わりを告げ、翌年の昭和60年春季リーグでは武庫川大学が38回目となる優勝を6季ぶりに果たしている。武庫川女子大はその後、平成2年秋季リーグまで12季連続の優勝を飾り古豪の完全復活を印象づけた。

## 9. 新しい勢力の台頭

しかし、平成に入ると新しい勢力が台頭し、年度ごとに、また、春秋ごとに優勝チームが入れ替わる、群雄割拠の戦国リーグが展開されるようになっていった。平成3年(1991)春季リーグの天理大(花田敬一監督)、平成6年(1994)秋季リーグの京都産業大(八十島優監督)、平成11年(1999)春季リーグの大阪国際女子大(今川功監督)、同年秋季リーグの園田女子大学(岸田良三監督)などの優勝がそれであり、また、最下部最下位よりリーグに参加した大阪女子短期大学(西田守監督)、金蘭短期大学(山崎武彦監督)が1・2部に進出してきたことも、こうした傾向にいよいよ拍車をかけてくることが予想される。一方、最近の5年間で6回の優勝を飾り、安定した実力を示している大阪国際大学(旧・大阪国際女子大)が、この戦国時代を制し新しい時代

の幕を開けようとする気配も感じられている。

## 10. ビーチバレーの歴史

ビーチバレーの全国大会は、平成1年（1989）より「ぴあカップ」として神戸須磨海岸を会場に開催されており、関西女子大学連盟は全国大会開催の地元学連として、この大会の予選を兼ねた「関西大学ビーチバレー男女選手権大会」を早くから開催し、競技の振興と強化に取り組んできた。この時代を先取りした積極的な努力が実を結び、「ぴあカップ ビーチバレー ジャパンカレッジ（全日本大学ビーチバレー男女選手権大会）」女子では、第1回大会の天理大学（高奥・岡本・段野＝当時は3人制）、第2回大会の武庫川女子大学（奥村・豊田・中嶋）の優勝をはじめとして、平成15年（2003）の第15回大会に至る間、実に11回の優勝を勝ち取り、日本における大学女子ビーチバレーの推進役を担ってきている。また、競技面だけでなく運営面においても、兵庫県バレーボール協会等と連携を図り、ビーチらしい明るく活気ある大会にすべく、連盟を挙げて協力を行ってきている。

## 11. 男女組織の統合

このように、全日本女子大学バレーボール連盟とほぼ同時期に結成され、約半世紀に及ぶ歴史を有する「関西女子大学バレーボール連盟」であるが、平成9年（1997）4月「関西大学バレーボール連盟」（男女の統括組織）に設置された「組織改革案起草委員会」の、約半年間におよぶ審議の結果提起された、男子学連「関西学生バレーボール連盟」との併合案が、平成10年2月の女子連盟総会において承認され、同年3月末をもって45年間の歴史に幕を下ろすこととなった。

その後、関西の大学女子バレーボールは、新組織「関西大学バレーボール連盟」として平成10年（1998）4月より新たな歩みを始めており、第1代理事長 清川勝行氏（平成10・11年度）、第2代理事長 南匡泰氏（平成12年度～現在）らの指導力と、強化指導普及委員長 吉田雅行氏らの斬新な企画力などにより、西日本所在の5学連（東海・関西・中国・四国・九州）の強化と組織充実を目指した「西日本大学バレーボール5学連男女選抜対抗戦」の創設（平成12年8月・2000年）をリードするなど、次代を先見した運営が行われている。

なお、平成15年（2003）4月現在の連盟加盟数は、女子75チーム（9部制）、男子67チーム（8部制）、合計142チームとなっている。

（追記）この原稿は2003年12月に発刊された「大学女子バレーボール50年の歩み」全日本大学

バレーボール連盟編に「関西女子大学バレーボール連盟の歩み」(著者：山本章雄)として掲載した原稿に、一部加筆したものである。